

令和5年度 奈良市立富雄南こども園 研究実践概要

園長名 尾北亜紀
全園児数 107名

1. 研究主題

たくましい体と心を育み、主体的に活動する子どもを目指して
～ “やってみたい” と自ら心と体を動かす環境構成や援助の工夫～

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

幼児期に体を動かす楽しさを味わうことは、生涯を健康に過ごす上でとても重要な事である。子どもは友達や保育者と一緒に体を動かして遊ぶ中で、諦めずに取り組んだり、友達と力を合わせたりするなど、体だけでなく心も動かしていく。しかし、自園の子どもの遊びの様子を見ていると、体の使い方のぎこちなさが見られたり、運動経験の不足を感じたりするときがある。また、子ども達は自ら環境に関わり様々な経験を積み重ねているが、「失敗したくない」「自信が無い」などの理由で諦めてしまったり、取り組もうとする気持ちがもてなかったりする。子ども自らが心と体を動かし、日々の活動の中で、「やりたい」「やってみたい」「おもしろそう」などの意欲的な思いや、体を使って遊ぶ楽しさ、最後までやり遂げようとする力を育み、主体的に活動する子どもの育成を目指していきたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

各年齢における発達の姿や、遊びに対する興味や関心を見極め、たくましい心と体を育み、子ども達が主体的に活動できるような保育内容の工夫や、環境、援助の在り方について探る。

②研究の重点

- 研究主題について職員で共通理解を図り、子どもの姿の見取りや取組、課題について、話し合いを重ねる。
子どもの発達段階や一人一人の興味や関心を踏まえ、子ども自ら体を動かしたくなる環境づくりや保育に取り組み、反省評価しながら、子どもが主体的に活動するための保育内容を創造する。
「やってみたい」「おもしろそう」「またやりたい」など子どもが楽しみながら意欲的に取り組めたり、継続する力につながったりするような環境構成や援助について、探っていく。

③活動の方法

【3歳児】

〈年度当初の姿〉

好奇心が旺盛で、戸外でダイナミックに遊ぶことを好む子が多い。しかし、バランスを崩しやすかったり、姿勢保持が難しかったりする姿がよく見られる。また、体を動かすことに自信がなくやろうとしなかったり、すぐに疲れて地面に座り込んだりすることもあった。

Table with 3 columns: 保育者の援助・環境構成, 保育内容, 子どもの育ち. Rows for 一学期 and 二学期.

三学期	添えるなどして、できた喜びを感じられるようにし、自らやってみようとする気持ちをもてるよう励ました。 ・お家ごっこでシートやベッド等を友達と一緒に運べるようにした。 ・凧をつくり、たくさん走って遊べるようにした。	リングジャングルジム、うんていなど)、ポックリ、サーキット、体操、体力づくりかけ足、凧揚げ】	とすることが増えた。 ・絵をかく時やリズム室での集会で、姿勢を保持できる時間が長くなった。 ・行事や園庭で異年齢児と一緒に過ごすことで、憧れをもち真似てしてみようとするものが増えてきた。
-----	---	--	---

〈事例〉「ドリーム21をつくりたい」10月～11月

自ら心と体を動かしている姿 環境構成・援助の工夫

秋の遠足で『ドリーム21』に行った経験から、似た遊具で遊べるようにと太鼓橋を用意すると、とても喜んで何度も挑戦していた。そこで、さらにいろいろな動きを経験できるようにと、ウェーブバランス平均台やバランスストーン、巧技台やトランポリン等を置き、サーキット遊びができるようにした。子ども達は「ここからやってもいい?」「これ(平均台)ちょっと難しいわ」と言いながら、繰り返し遊んでいた。トランポリンや平均台では、一人一人の様子に合わせて保育者が手を添えたり体を支えたりしながら援助をしてきたことで、次第に子ども達の方から「手、持たなくてもいけるよ」と言うようになり、できた時には「できた」と嬉しそうに話す姿が見られた。



〈考察〉

- ・遠足の目的地に様々な動きを経験できる運動遊具のある場所を選び、体をしっかりと動かして遊ぶ楽しさを十分に味わえたことで、運動遊びに興味をもつことができた。又、園での遊びも活発になり、やってみたいという意欲が高まることにつながった。
- ・運動遊びに繰り返し取り組むことで、できるようになるということが実体験で分かり、一人一人の自信にもつながった。

#### 【4歳児】

〈年度当初の姿〉

慣れ親しんだ遊びや活動には楽しんで取り組み、友達を誘うなどとても意欲的である。しかし、初めてする活動や体操、ダンスなどには、新しい活動への不安感や、見通しのもちにくさから、挑戦しようとする気持ちがもちにくい子どもが多かった。

	保育者の援助・環境構成	保育内容	子どもの育ち
一学期	・年間を通して様々な種類の体操や運動遊びに、クラスのみんなで定期的に取り組む計画を立てた。	【固定遊具、ねことねずみ、タオル引っ張りゲーム、リズム遊び、体操、サーキット遊び】	・繰り返し行うことで、少しやってみようとする姿が出てきた。
二学期	・固定遊具や簡単なサーキットで遊べるようにし、繰り返し遊ぶ楽しさや体を動かす楽しさを感じられるようにした。		・保育室前の廊下などを使うことで自然と体を動かすことが多くなった。
三学期	・共通経験で、体を使ったゲーム遊びやサーキット遊び、クラスのみんなで固定遊具に挑戦するなどの機会をもった。	【新聞紙遊び、お尻歩き鬼ごっこ、大縄、サッカー、リレー、氷鬼、バナナ鬼、転がし中当て、うんてい、てつぼう、リズム遊び】	・遊びの準備を自分達で行い、遊び始めるようになった。
	・広い場(リズム室)でも安心して活動できるように、保育室でしていた運動遊びやゲーム遊びを取り入れた。又、新しい動きも少しずつ加え、体を思いきり動かす遊びやルールのある遊びなどを行った。		・5歳児に憧れをもち、やってみたいと思うようになった。
	・5歳児がしている遊びを一緒に経験できるように計画し、挑戦する機会をもった。		・新しい体操や遊びにも興味をもち、保育者や友達と一緒にやってみようとする姿が増えた。

〈事例〉「体操をしよう！」 4月～2月

自ら心と体を動かしている姿 環境構成・援助の工夫

進級当初から1～2ヶ月ごとに継続してできる体操をしていこうと学年で計画を立てた。(①ちょっとだけ体操 ②昆虫太極拳 ③エビカニクス ④ラーメン体操 ⑤パイナポー体操など) 初めはなかなか取り組みにくかった子が、月の後半になると好きな動きのところだけやってみたり、新しい体操をし始めた時に以前していた体操の曲が流れると、全部してみたりして、動きが分かってくると楽しんで体操する姿が多く見られるようになった。また、昆虫太極拳など動きが速くなっていくことに苦手意識を感じ、取り組みにくかった時には、動きを見て確認できるように保育室にポーズの写真の写真を掲示しておく、よく見える位置に自ら行ってやってみようとする姿が見られた。「すごいね!」「速くなると難しいけど楽しいね!」と声をかけると、嬉しそうにしていた。

継続して体操することで、様々な体を動かす活動や初めてする活動へも「これはちょっと難しい」と自ら保育者に知らせたり「手伝って」と伝えたりしながらも、やってみようとする姿が増えていった。

又、3学期には体操や表現遊びなどの新しい活動にも、最初からみんなで楽しんで取り組む姿が見られた。前で保育者がしている動きを見ながら一緒に体操をしたり、新しい手遊びを保育者や友達と一緒にすることを楽しんだりして、新しい動きや活動にも自ら「やってみよう」意欲的に取り組もうとするようになってきた。



〈考察〉

- ・初めての動きや体操への苦手意識から取り組みにくい姿が多かったが、不安が軽減するように継続的に同じ体操や運動遊びを取り入れたり、少しやってみようとする姿を逃さずに頑張りを認める声掛けをしたりするようになってきた。そうすることで、一人一人が自信をもち意欲的に活動しようとする原動力になってきているのだと考える。
- ・「やってみよう」と自ら心と体を動かすためには、まずは「やってみよう」と様々な事へチャレンジしようとするのも大切なのではないかと考える。「やってみよう」から「できた!」という経験を経て「やってみよう」と心と体を動かす姿へ繋がっていくとを感じる。

### 【5歳児】

〈年度当初の姿〉

体を動かすことが好きで積極的に遊ぶが、すぐに転ぶ、ぶつかるなどの体幹の弱さがみられる。また初めての活動に対する好奇心は強いが見通しのもてないことには苦手さがあり、取り組むまでに時間を要する姿がある。

	保育者の援助・環境構成	保育内容	子どもの育ち
一学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全身を使って遊ぶ遊びができるような環境を準備する。</li> <li>・体を動かす(動の)活動だけではなく、止める(静の)活動を積極的に取り入れる。</li> </ul>	<p>【サッカー、鬼ごっこ、サーキット遊び、マット運動】</p> <p>【だるまさんがころんだ、飛行機バランス、二人バランス、ケンケンパ】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ものや人との距離感が分かり適切な距離を保ったり、姿勢を保持したりできるようになってきた。</li> <li>・共通経験で体を動かす遊びを取り入れたことで苦手なことにも挑戦する気持ちが芽生えてきている。目標や目的をもって遊ぶことができるようになり、継続して遊びを進められるようになってきた。</li> </ul>
二学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・引っ張る、押す、渡す、叩く、なでるなどの力のコントロールやものや人とタイミングを合わせるが必要な遊びを取り入れる。</li> </ul>	<p>【風船遊び、タオルの引っ張り合い、つなひき、ふれあい遊び、おしり歩き、ボール運び競争、リレー、フラフープ、なわとび、鉄棒ぶら下がり、かけ足】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・力加減がわかるようになり、スムーズに遊びが進められるようになってきている。又、ルールや遊び方を自分達で決め、共有しながら遊ぶ姿もでてきた。</li> </ul>
三学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・力のコントロールや姿勢、人やものとの距離感を図ったり保ったりする必要がある遊びを取り入れる。</li> </ul>	<p>【投げごま、けん玉、ドッジボール】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周囲の状況を見ながら遊びを進められるようになってきている。友達に認められたり、教えたりする経験を通し、自信をもって取り組めるようになってきた。</li> </ul>

〈事例〉「今日もドッジボールしたいな」 1～2月

自ら心と体を動かしている姿 環境構成・援助の工夫

いろいろな運動遊びに取り組む中で遊び方やルールを全体で共有し、繰り返し確認しながら進めるようにしてきた。ドッジボールは初めのうちはクラスでルールを確認しながら進めていくことで、遊び方が分かるようになり、学年でも楽しめるようになった。繰り返し行ううちに、友達同士で「投げ方上手」「ボールそっちにいったからお願い」など声を掛け合いながら遊ぶ様子がみられるようになり、友達とルールの確認をしたり喜びを分かち合ったりできるようになってきた。

また運動遊びに苦手意識がある子も「今日もやりたい」「片手で投げられるようになりたい」と積極的に参加する姿がみられるようになった。諦めずにボールを追いかけることで自分でボールが取れるようになってたり、相手に背中を向けて逃げていた子がボールを目で追えるようになってたり、友達の後ろに隠れていた子がボールを取ろうと前に出てくるようになってきたりしている。



〈考察〉

- ・初めのうちにドッジボールのルールを何度も確認したことで遊びのルールが定着し、自分達で遊びを進められるようになった。またルールを理解しているからこそ、遊びの楽しさや面白さが分かり、繰り返し遊びたいという気持ちをもてるようになった。
- ・繰り返し続けていくことで友達がモデルとなり、なりたい自分の姿がもてたことで「挑戦してみよう」「自分もできるようになりたい」という思いをもつようになり、実際にやってみようとする姿につながっていったと考える。
- ・「できた」という経験を積み重ねていく過程で、失敗や困難に直面しても友達や保育者に励まされたり、力を借りたりしながら乗り越えられたという経験や自信が必要であると考えられる。

## 5. 研究の成果

- ・年間を通して体づくりにつながる活動や、「してみたいな」「できるかな」という子どもの思いに寄り添い、興味、関心、発達段階を見極めながら、繰り返し遊びを進めてきたことが、「楽しかった」という思い、「もっとしたいな」という意欲、諦めずに繰り返し挑戦する気持ち、「やればできる」という自信になり、主体的に取り組む姿につながったと思われる。
- ・いろいろな運動遊び等を学年の枠を超えて経験できるようにしてきたことで、集団で遊ぶことの楽しさや、異年齢児に憧れの気持ちをもつきっかけになった。
- ・子どもが楽しみながら心と体を動かし遊ぶためには、繰り返し遊べる場や、時間の確保、環境構成、励まし合い一緒に活動する友達、一人一人の心の動きを読み取り、挑戦意欲を引き出す保育者の援助や保育内容の工夫、学年を超え保育者同士が思いを出し合えるつながりが、大切であることが分かった。
- ・全ての活動が体づくりにつながっていくことから、自分から「やってみたい」の気持ちをもって取り組むために丁寧に仕方を知らせたり、一緒にできた喜びを共有し認めたりすることを積み重ねてきた。サーキットや固定遊具等の運動遊びに進んで取り組む姿になっただけでなく、姿勢の保持等の生活面での成長も多く見られた。

## 6. 今後の課題

- ・今年度の取り組みから、年間を通して継続して取り組むことで子どもの育ちを実感することができた。今後も子どもが自ら「やってみたい」と思わず動きたくくなるような環境づくりや保育内容の工夫に努めていきたい。
- ・子どもの「やってみたいな」を探り、保育の環境を整えていく中で、保育者同士で子どもの姿を見取り、興味や関心、今子どもに何が必要なのかを話し合い、環境構成の再構築をしていくことの大切さを感じた。引き続き、子どもが（自然と、知らず知らずのうちに・無意識に）心と体を動かし、夢中になって遊ぶことを楽しめるような、保育内容の工夫や見直しを行ってきたい。